

の如き亦其著しき者なり其他佛法に關する著述頗る多し例へば英語にてハマックスミ  
ルル氏の宗教學講義其他モニエルウヰルリアムス氏の印度の智慧ハルデー氏の佛法  
要論エドキンス氏の支那佛教論バルト氏の印度宗教論ライス、マビツ氏の佛教論其他  
アラバステル氏の法の輪又獨逸語並佛語にてハコーベン氏オルデンベルグ氏サイデル  
氏バルヌーフ氏セントヒレアル氏等の著述あり

然れども此等の固より學者の爲に著述せる者にして廣く世間に行れざりしか千八百八  
十二年に至りて亞細亞之光と題せる一書世に顯はれたり著者のロンドン日々新聞の記  
者にしてエドウヰンアルノルドと云へる人なり其書の躰裁を概言すれば釋迦の一代記  
を長歌躰と綴れる者にして其文亦美麗なりとす此書一たび世に出てハより從來學士  
等の解し難き哲學的の議論にハ左まて意を留めざり人々にも其文章の流暢にして優  
美なるを愛して之を讀む者甚だ多しと云ふ然れども固より僅に數篇の詩歌に由て佛法  
の真相を識るべきに非れハ其見解の淺薄なるハ是非なることなれと偶々其言語の聖書の  
言語に類する者あり(アルノルド氏ハ該書中に屢々新約書の語を用ゐたり)又釋迦一代

の言傳SCOURと基督在世の事迹と相類する者あるを見て妄りに佛法と基督教ハ大同小異なり  
と評し甚しきに至りてハ四福音書を佛法に基て記せし者なりと評する者あり妄評も亦甚  
しと云ふへ

米國アレグシー神學校教授ケルロツグ氏の早く既に此弊を看破し嘗て「カトリック、プ  
レスビテリアン」プレスビテリアン、リビウ等に於て其妄を辨したりか昨年又一書を  
著し釋迦の言傳教義道德と基督の傳記教義道德とを綿密に比較し其異同を辨明し  
たり題して亞細亞の光と世界の光と云ふ敢て新見創意多しと云ふに非れとも其穿鑿の  
綿密周到にして其議論の公平なるハ一讀して明白なり氏の今米國の神學校教授なれど  
も曾て十一年間印度に在て傳道に従事し該國古今の語學に通し印度語文典等の著述あ  
る人なり

方今本邦に於ても基督教佛教の異同優劣を論する者少しとせず又兩教の關係ハ是より  
増す重大ならんとす故に今此書の要點を略述し以て此問題に注意する人々の參考に供  
せんと欲す

第一ケルロック氏の佛法と基督教を比較する前に當て其基礎憑據たる所の歴史を講窮するの必要を主張したるは是れ至當の論にして又極めて緊要なる事なり  
 今を去ること一千八百八十九年亞細亞西南の一隅なるユダヤ國にナザレのイエスと云へる人の實に生存したる事、苟くも事理を辨する者の更らに疑いざる所なり唯其誕生の年月に關しては少く異説ありと雖最も極端の異説を取るも其差は僅か六六年に過ぎず又其在世の年間も三十二年より三十四年と做す是れ唯基督信徒の信する所に非ず基督を信せざる最も極端の評論家と雖許諾する所なり又基督一代の傳記たる四福音の孰れも第二世紀の半の前に成れる者たること明證あり四福音中約翰傳福音書を以て最後の著述となすの批評家の通論なるカポールの之を基督紀元百六十年より七十年間の著述と做せしか其後セルレルの之を百五十年と爲し又其後ヒルゲンヘルド又ヒカイムは百二十年より四十年間となすセンケルの百十五年より二十年間の著述と做せり此八々の孰も獨逸國道理派の批評家なり最後の福音書たる約翰傳よりして尙此の如く批評家の一般に最初の福音書と做す所の馬可傳の五十五年より百年間の著述と做せりフオ

ルクマルの之を七十三年と做しセンケルと六十年と做しヒツシグの五十五年より五十七年間の著述と做せり而して馬太傳路加傳の此兩福音の間に著述せられたる者とす路加傳の如きハエルサレム陷落の前に著述せられたると明白なるか如く加之使徒パウルの書信中最も緊要なる四書即ち加拉太書羅馬書哥林多前後書の皆エルサレム陷落前に著述せられたる者なりとの批評家一般の定論なり

然らば則ち近時の最も不信なる批評家の説に據るも基督の行狀教訓を記載する所の書籍の其最後の者も基督紀元百三十年より後れす其最始の者は七十三年若くは五十五年既に著述せられたる者なりとす即ち基督教の基礎憑據たる記録の最も緊要なる者の其事の起りたる時代に著述せられたる者なりとす

且夫れ耶蘇の誕生せるハ遼焉たる上古の世に非ず又其生存せるハ當時世界に知られざる野蠻國に非ず實に耶蘇の降誕せるハアウガスト、カイザルカローマ帝國の位に坐して文物隆盛前代未聞と稱したる時にして耶蘇の生存宣教したるはローマ帝國中最も好く知られたる一州なりき耶蘇の時代の即ちビルシルトタヌスウトニアスの時代なり

決して或論者の唱るか如く人々事物を妄信したる時代に非ず反て古來の宗教哲學に倦み疲れ自然の理外の事をは全く厭棄せんとしたる時代なりき

耶蘇基督の言行教訓の憑據及び其在世の事情大略此の如し今之を釋迦牟尼の事に比較して果して如何第一釋迦牟尼の今より幾百年前に生存したる人なるやと尋ぬるに方今印度國の古文學並佛法の事に最も通曉せる學士等の說區々にして一定せずマックスミルレル氏の基督降世紀元前(以下之に倣へ)四百七十七年を以て釋迦死去の年となしバルト氏の四百八十二年より七十二年の間とライイス、ダビッド氏の四百十年とケルン氏の三百八十八年とウヰス、アルト及びウヰブル氏の三百七十年より三百六十八年の間となせり此の如く其間殆んど二百年の差異ありシロン島の佛徒の說に由れり釋氏の死の紀元前五百四十三年と云ひ又或の紀元前二千四百二十年と倣すもあり他日探索の益す精密なるに隨て或の幾分か此等の差異矛盾を減少することあらん然れども到底我儕か基督の言行を確知するか如くに釋迦一代の事迹を確知せんとの冀望すへからず何となれの當時印度國に正史なければの也印度人か歴史の年代を記録するに迂かり

ことは人の熟知する實事なりオルデンベルグ氏曰概して印度人の事の時代を記するも未だ曾て適當の機關を有せずと又曰當時に在ての(即ち釋迦の時代)人の傳記と云ふ事の全く意想の外なりきと故又當時の事に就ては更に信用すべき史乘なく畢竟皆臆斷推量に過ぎざる也其事情既又此の如し釋迦氏實錄の後世に傳へらるして妄誕無稽殆んど極なきの亦怪むに足らざるへ

然れども釋迦在世の年代に就て學士の意見區々なること始く置き其最後の年代即ち紀元前三百六十八年より七十年間を以て其死去の年と假定するも釋迦の言行教訓を記載する所の經文類の果して其時代に成れる者なるや或の數百年の後よ作れる者なるや之を確知すへからず實にライイス、ダビッド氏の釋迦死去の時代に印度國の文字ありや否疑ふへいと云へり

蓋釋迦牟尼の言行教訓の憑據と爲す者の第一南方佛徒の教典たる「トレヒタカ」第二同經の註解「アルタカタ」第三北方佛徒即ち西藏支那等の佛徒の教典とす然れども此等の經典の何時何人の手に成れる者なるや確知すへからず「トレヒタカ」の一部「ヒナヤヒ

「タカ」の如きの紀元前三百六七十年比に成れる者なりとの説あれども是れとて確證あるに非ず縱令此等の經文の其時代に既に今の形を成せる者とするも最初より書に筆したる者に非ず數百年間口々相傳へ然して後に始て書に筆したる者なりとす果して然らば其間幾多の遺漏或の訛傳あるや知るへからず實に佛徒自から明言する所に由れの後世大會を開て經文を一定し且之を書に記したるの衆口に往々誤謬を生し其まゝ又放棄せし遂に眞偽を別つ能はざらんことを恐れてなりと云へり然らば則ち所謂釋迦氏の經文なる者の果して純乎たる釋迦の教訓說法なるや或の後世門徒等の自己の意見を追加せる者なる乎確知すへからざるなり且夫れ其經文の今世に存する所の者の多くの翻譯書にして原本に非ず而して其翻譯の如何に精確なるや或の如何に粗漏にして誤謬多きやとも確知すへからざる也實にシロンの史家某の彼の大會の僧を責めて左の如く云へり曰大會の僧等宗教を顛倒したり古き經典を破て新き本文を作り說法の順序を紊り云々又之を新約全書の確實なると其本文の純粹なるとよ比較すれば其差別尙堪も當ならざるなり

之を要するに耶蘇基督の言行教訓の親炙して其行爲を視其教訓を聽たる人々の保證に由て之を確知すべく其事迹の當時の歴史に徴して其眞偽を定むることを得へし之に反して釋迦牟尼の言行教訓の數百年間口碑に相傳へ其死後四百年より千年間に漸く書に筆したる者にして其間幾何の誤謬を混淆したるや知るへからず而して釋迦在世の事迹の如きの更に同時代の人の保證なく唯僅に口碑遺傳に由て之を推察する耳然らば則ち此一點に就ても佛法と基督教との間に天地の差別あることを知るへし

曩者ケルログ氏の第一に佛法と基督教とを比較する前に當て其憑據たる所の歴史を講窮するの必要を主張せることを略述したるか第二に氏の釋迦牟尼の傳説と耶蘇基督の傳記とを比較して其異同を辨明したり

既に佛經の由來を論したる所に由て明白なるか如く不幸も釋迦の實録の世に傳へらざるか故に我儕今其行跡を確知するよ由なし然れども現今諸佛教國に行はるゝ所の釋迦の傳記と稱するものを見るに其中に基督の傳記と符合する如きもの少からず例へば

(一) 釋迦はカヒラワツの王スワードホダナの子なりと云ふは基督がイスラエルの王ダビ

デの家<sup>一</sup>に生れたる事に符合一(二)マヤ夫人靈夢に感して悉達太子を生むと云ふの處女マリヤか聖靈の大能に由て耶蘇を孕みたる事又符合一(三)隣邦の王ヒムバザカと云へる者か釋迦の非凡の少年なることを聞て己の位を奪われんことを恐れ使者を遣ひて其舉動を探檢せしむと云ふことハ<sup>一</sup>ヘロデ王か東方の博士より耶蘇の誕生を聞き己か位の危からんことを懼れてベツレヘムの小兒を殺戮したる事に符合一(五)釋迦か竟に心を決し妻子を捨て王宮を出たる時に惡魔マラ來て頻に其心を變せしめんと試みたりと云ふの基督か世に出て公然道を宣る前廣野に於てサタンの試惑を受けたる事又符合する如し實にエイテル氏の如き左の如く迄に明言したり其語に曰く

佛徒の傳説に由れり釋迦牟尼の天より降誕し處女より生れ天使の歡迎を受け老たる預言者の祝福を受け神殿に獻けられ水を以て洗禮を受け其後火を以て洗禮を受けたり又博識の學士と問答をなし其智慧と即答に由て彼等を驚愕せしめ靈に由て曠野に導かれ惡魔に試みられたる後教を宣へ其奇跡を行ひて四方を經歷したり又常に稅吏罪人の友となり嘗て山に於て其容貌變じたることあり而して遂に地獄に下りて後復

た歸天したりと云ふ實に概言すれり基督の十字架刑の一事を除て凡そ基督の生涯に於て特異なる所の事悉皆釋迦牟尼コーマ佛陀の傳説中に之を發見することを得へりと(エイテル氏佛敎三論)

是れ蓋し形容の語にして字面上に從て解すべからざるの勿論なりと雖も兎に角釋迦牟尼の傳説と耶蘇基督の傳記との間に相似たるの明なり果して然らば何故に其間に此の如く相似たる所あるや其解説なかるべからざるなり楮ケルロツク氏の此問題に就ては左の六種の解説の外あるべからざる事を論じたり

- 第一 此符合は單に人々の想像に過ぎずして眞實の符合あるに非すとすか
- 第二 眞實に其符合ありと雖も偶然の暗合に過ぎとすか
- 第三 此符合の同境遇に於て同原因の活動に由て生じたる者となすか
- 第四 佛敎の傳説中に其本を基督の傳記より取れる者ありとするか
- 第五 之に反して基督敎の福音書を記載する所の事にして其本を佛敎の傳説より取れる所ある乎若くは更に一層古代の本源ありて佛敎基督敎共に其本を之より取れりとす

るか

第六 若くは右五種の解説中の或者又の凡を合せて而して後より始めて完全なる解説を得へりと爲す耳

蓋右六種の解説中に就て我邦人の第一に注目する所の者の第五説なるへ一人々の斯く思惟するも亦其理なきに非す何となれに角に佛法の基督教に先て世に起りたる者かれは若く其傳説又教理等に相類似する所われの先つ後に起りたる者の前より起りたる者より借たるに非すやと思惟するの當然の事なれなり然れども此の如き問題の唯理論に由て定むへからず須く歴史に徴し事實に據て定むへきなり然り而して果して基督教の經典に於て佛より借りたる所わらば其經典の成れる時佛法の既にユダヤ國へ行へるか若くは印度とユダヤの交通自在にしてユダヤ人の印度に往來したる証據なかるべからず苟も其證據あらざる以上は決して理論を以て之を定むへからざるなり然らば基督教在世の時若くは福音書編成の時に當ては佛法のユダヤ國に知られたりや若くは印度ユダヤの間に交通の路の開け居たる乎と尋ねるに更に其証據あることなり第

一 佛法とアレキサンデル大帝の時即ち紀元前二百五十年頃に至る迄の一寸も印度國外に廣らざりしが其頃アソカ王と云へる人起りて大に佛法を保護し四方に傳道師を派遣し始めたり而して佛法の漸々東に向て廣まり第一世紀中に支那に傳はりたる証據あるか如くと最も何故か西に向ては更に廣らざりなり蓋佛法の西洋諸國又は地中海邊の諸國に廣りたること佛徒自らも主張せざる所なり

又基督教在世の時若くは福音書編成の時又當て印度とユダヤの間に交通ありたる証據更にならばユダヤ人の古より遠く外國に往來して貿易を爲せる人民なること人の熟知する所なるか當時彼等の印度國迄達したる証據の更にならば或人エルサレムに於て諸外國に寄留するユダヤ人等の所有する會堂の目錄を記載せる古書を探索したるに印度にあるユダヤ人の會堂なし(教授セイ、エ、カルペントル氏か千八百八十年十二月の「ナインティンセンチウリー」に出たりたる佛法と新約書と題せる論文を見るへ)又監督ライトフートの此事に就て最も精密なる探索を遂けたるか當時印度ユダヤ間も交通なかりし事を證明したり加之ならず若く果して基督教の時代に於て佛法既にユダヤに行はれて釋

迦牟尼の傳説耶蘇基督の傳記に混するに至れりとせ之何ぞ獨り基督の傳記に於てのみ此事ありとする乎當時の他の著述論說中にも多少佛説の混したる形跡ある乎若くは當時の學者中より佛法の事を論辨したる者あるべき等なり然れども實際更に其証據あることなり

人或は曰はん當時パリサイ、サドカイ兩宗と併ひ行れたる彼のエッセネー宗の如きは佛法より出たる者に非ずやと實にエッセネー宗なる者の佛法と全く遁世主義の宗旨なり然れども出家遁世獨身苦行と云ふ事の決して佛法に限れる思想に非ず明白は佛法との何の關係もなき宗教に於ても同様の主義を守らんと試みたる者あるは珍らからぬ事共なり此點に就ても監督ライトフートの極めて精密なる探索を爲して左の如く斷言したり曰唯ポラス王がアウグスト帝に使節を遣はしたる時に其從者中に一人の印度人ありアテンスに於て自ら燒死して衆人の目を驚したりと云ふ話（是れとても信し難き話なり）の外より異邦人の書類を探索するもユダヤ學者の書類を涉獵するもエッセネー宗が全く廢滅して久き後に至る迄のローマ帝國中に佛法の知られたる証據なし（同

氏哥羅西書及び腓利門書註解餘論第二エッセネー宗起源並關係論を見よ）

然らば則ち基督の時代に佛法のユダヤに入りたる証據之なきなり果して然らば事實佛説の福音書に混雜すべきやうあらざるなり

然れども是のみに非らず抑馬太傳馬可傳路加傳の三福音書は曩にも述たる如く最も極端なる批評家の説に據るも基督と同時代即ち紀元五十七年乃至百年間に成れるものにして而かも其著者の基督に親炙して教を受く人々或は其等の人々と偕に傳道に従事したる者なりとす然るに如何にして釋迦の傳説が基督の傳記と混すべきや親く基督の教訓を聞き親く其行を見たる人々の存命中に成れる書籍に於て如何て此の如き事あるべき理に於ても決して此の如き事あるべからざるなり

又此處に一の注意すべき事あり即ち彼の基督の傳記に符合すと云ふ所の釋迦の傳記なる者の基督紀元前より存在したる証據なき事是れり反て此等の傳説中には紀元後よきて起る者少からざる証據あり畢竟其等傳説の基督降誕前より存在したりと云へばこそ基督教の佛法より借りたる所なき乎との疑問も生するなれ果して其証據なしとせば此

疑問の自ら消滅に歸するなり

然らぬ始めも擧げたる符合を如何に解説するやと問ふ者あらぬ我儕の未だ佛教の事よ  
就ての探索充分ならざるか故に十分の解説を得すと答ん耳然れども左の二三ヶ條に注  
意することを必要と思ふなり

第一所謂基督の傳記と釋迦の傳記との符合なる者の中より往々單に皮相の類似にして  
其實の更に相似ざる者少しとせず譬へ其前生の説の如し即ちキリストも降生の前よ  
り存在したりと云ひ釋迦も降生前より存在したりと云ひ且孰れも萬民を救済せんか爲  
に此世界に降誕したりとあり唯斯く言去れぬ此事の如何も符節を合するか如くなれ  
ども細かに之を察すべし決して然らず反て其異なる所の相似たる所に倍するを發見  
すへり而して之を符合と云ふんよりも寧ろ反對と稱するの適當なるを感すへり試に聊  
か之を論せん第一其降生前の存在の有様に於て天地の差別あり蓋基督の降生前の存在  
は一種無比の存在にして他人と共に然りしに非ず然れども釋迦の前世の他人の前世と  
同道理に因れる者となせり獨り釋迦のみ前世あるに非らず佛説に由れぬ惟に萬人のみ

ならず禽獸に至る迄も前世あるなり又基督の降生前に存在したるの父なる神と無類の  
榮光を以て存在したるなり然れども釋迦の前世の之に異なり是未だ此世界に生れざる  
時より種々の境遇を経過し或時は貴く或時は卑しかりしと云ふ即ち修行者となりたる  
こと八十三回國王となりたること五十八回バラモンとなりたること二十回サカ神と  
なりたること二十回木神となりたること四十三回奴隸となりたること五回惡魔踊（デ  
ヒルタンソン）となりたること一回鼠となりたること一回象となりたること二回なり  
と云へり若し釋迦降生前の有様の此の如き性質の者あるを聞かぬ誰か敢て之を基督降  
誕前の存在の教に符合すと云ふ者あらん

又釋迦の處女より生れたりと云ふ傳説あり實にマブセン氏の如きの釋迦は聖靈より由  
て孕まれ處女マヤより生れたりと云へり然れども其實果して如何誰か佛法に於て基督  
教に説く所の聖靈の教ありと云ふ乎佛徒自ら決して斯くの云はざる可し又或國に釋迦  
の處女より生れたりとの傳説ありと云ふ説あれども釋迦の母マヤはスワードホダナ王に  
嫁して四十五年の後始めて一子を得たりとの普通の佛説に非ずや然らぬ是れ又眞實の



符合に非ずして唯奇を好む學士輩の想像に過ぎざる耳甚きに至ては釋迦如來と云ふと  
 と基督を指して「來らんとする者」と稱したることを引て符合の或は訛傳なりと云へる  
 者あり固より如來と云ふ語に就ては種々の解説あり或は「先輩の去れるか如くして來  
 れる者」の義に解し或は「此の如くして往たる者即ち再ひ此世に來らざるやうに往きた  
 者」の義に説き或は「此の如く來れる者即ち凡の人と同一運命を以て來れる者」の義に  
 解し其他にも尙種々の解説ありて學者の説未だ一定せずと雖も兎に角に聖書に所謂る  
 「來らんとする者」と云ふ意義は非らざることを佛徒自ら證明する所なるへし此の如き臆  
 説に至ては符合に非ずして附會の極と謂て可なり然れども所謂釋迦基督の符合なる  
 者の細かに查察すれば大抵此の如き類なりと知るへし  
 第二或は偶然の暗合もあらん然れども是は獨り基督と釋迦との間に限れる事に非ず古  
 より大人豪傑の爲す所期せずして吻合せること天下の歴史に於て其例乏しからず例  
 への釋迦も基督も公然世に道を宣る前に當りて斷食したる事の如き或は又釋迦も基督  
 も國王の家に生たりと云ふ事の如き或は又其誕生の時に高價の禮物を携へ來れる者あ

りと云ふ事の如き是なり蓋斷然志を立て、一大事業を起す前に當て沈思默念遂に飲食  
 を斷つに至れる者の其他も亦少からざるへし王家に生るゝ者及び誕生の時に高價の  
 禮物を受る者も亦然とす此の如き事を以て暗合と云ひ、天下何人の歴史か暗合せざる  
 者あらん

第三或は亦其境遇の同一さより同様の形迹を顯したる者あらん西洋の諺に歴史は自  
 ら反覆する者なりと云ふ事あり蓋人情の古今東西の別なし世界の歴史に於て同境遇に  
 同原因ありて同様の結果あることは敢て奇とするに足らざるなり然り而して釋迦牟尼  
 の印度に起りたると耶蘇基督のユダヤに生れたる時の有様を比較するにバラモン人か  
 印度の平民を壓抑せる状態とパリサイ人かユダヤに跋扈せる形情に於ては殆ど符節を  
 合するか如き者あり斯る場合に於て釋迦かバラモン人を戒めたる語と基督かパリサイ  
 人を責めたる語と於て相類する所あるは怪むべきに非らず反て之を豫期すべきなり而  
 して其經典を尋ぬるに果して此事あり例への「タンマハダ」に曰（東洋聖經集第十卷第  
 一篇）嗚呼愚者よ髪を飾り山羊の皮衣を着るとも何の益かあらん汝外面を潔くすると

雖も衷にの即ち貪慾ありと基督パリサイ人を戒めて曰(馬太廿三の廿五)偽善なる學者とパリサイ人よ波等杯と盤の外を潔して内にの貪慾と淫慾を充せりと又釋迦バラモンの偽教師を責て曰(東洋聖經集第十一卷「テビシヤスタ」)衆盲相率ひ相引く時の最先の者も見ることも能はず真中の者も見ることも能はず最後の者も見ることも能はず余思ふにバセッタよバラモン人等か三「ピタ」を説くも亦之に異ならずと基督も學者とパリサイ人の無識を評して言へることあり曰(馬太五十四)彼等を棄置け替者の手引する替者なり若し替者替者の手引せし二人共に溝に落つへしと是れ即ち其事情の均しきより起れる符合なり又孔子の己の欲せざる所を人に施す勿れと云ひ耶蘇の己の欲する所を人に施せと命たり然れども誰か孔子語と基督の間に歴史上の關係ありと思惟する者あらん

之を要するに第一基督の傳記の佛説より取れる所ありとの説を維持するに二ヶ條の大困難あり一、福音書編成の時に當て佛法のユメヤに知られたる証據なり二、始の三福音書の近時の批評家探索の講究に由て基督降生後百年間に其直弟子等の手に成れる事確

定せり然らば彼等か基督の傳記を著す時又當て誤て釋迦の傳説を其中に編入すへき所以なり縱令彼等の故意に此の如き事を爲さんと欲したりと假定するも當時の人皆其誣妄を知るへけれの之を成し得へきやうなり又都て彼等に此の如き意ありと思ふ者もあらざるなり第二所謂釋迦と基督の符合中にの惟た或人の想像のみ存して細かに之を察すれの全く消滅する者あり第三或の偶然の暗合に属すること明白なる者あり第四其事情境遇の同一さより起れる所の者あり佛學の大家ライスメヒツ氏曰「バリーピタカ」(佛敎の名なり)と新約書に間々類似の文章あるを示すの難さにあらざる可し然れども或著者輩か此の如き類似は據て此二書の間に歴史上の關係ありと論窮し且新約書の後に成れる者なるか故に佛書より取れる所ありと言ふに至ては余飽まで其妄を辨せん余を以て之を觀れの此二書の間に歴史上の關係の毫も之れなき者の如し而して實に其類似する時の(最初其類似の最も大なりと見へし者の細かに算すれの最も小にして其最も小なりと見へし者の反て最も大なることあり)基督敎に於て佛説を借たるにも非ず又佛敎に於て基督敎を取たるにも非ず但此二敎の起りたる時の事情の相同しかり

一に因る耳と蓋正論と云ふへ一(東洋聖經集第十一卷百六十五、六十)  
此他佛法の教義及び道德と基督教の教義及び道德に就て種々の有益なる比較を立ることを得へ一と雖も紙數は限あるを以て今之を略す若し幾會あらし異日亦更に之を論せんと欲す但望むらくは讀者諸君の此不完全なる概略を以て此重要なる問題を放棄することなく親くケルロツグ氏の著者に就て之を講究せられんことを吾敢て其勞の必らず十分の報酬あらんことを保証す

第十三

近時佛教論

(大内氏編佛道大意吉谷覺壽氏著)  
(佛教要旨井上圓了氏著佛教活論)

(六合雜誌第七十五號)

植村正久

思ふに佛教の廣大なる宗教よりて、其歴史の許多の邦國に亘り、長き歲月を經過せり、其の主義の古今億兆の精神を支配し、將に過ぎ去らんとする東洋今日の文明を模造するに多少與かりて力ありしものなり、左れば此の如き宗教を研究することの學者に

取りて頗る利益多く且つ面白きことならん、況て吾か耶蘇教の如きは是より佛道に代りて日本に行ゆる可きものなるか故に、彼の主義を明らかにし、又其の人事は關する所を究め、我れの教を施すべき要所を見出すは随分大切なる事と謂ふへ一、然れども此又一つの困難あり佛道の典籍浩濶にして其の所説區々に分れ、説明の體裁甚だ不完全にして趣意定かならず、文辭言語繁に過ぎて義理を隱蔽するの恐れあり、恰かも樹木の技葉余りに繁茂して果實の所在を知るに苦むか如し、加ふるに無用の術語を用うること甚しき爲に讀者を勞すること少小に非ず、譬へは庸醫か人の病床に就きて妄りに醫家専門の言語を弄ふに異ならず、佛教の學者若し其の道を廣く世間に傳んと欲せし、第一に其の文學を一變して普通のと爲さざる可らず、第二に基督教徒の間に行はる組織神學の禮お倣ひて佛理を説明し一讀の下に其の梗概を知らしむるを要す、第三其の術語を成る可く泰西哲學の語と同一ならしむへ一、佛者難解を得意として神出鬼没本体の分明ならざるを喜ぶの陋習を棄て、以上開陳する方法を採用することあらば、彼我の便利攻守ともに大ひならんとす、近時世に出てたる佛道の論著を讀みて深く此

の事を感じたるか故に此に之を一言す、

此の篇の冒頭に掲げたる著書中佛道大意の、葛城慈雲尊者等の諸名僧が論述せし所を集めて一冊の書と爲したるもの故、文章の如きに至りての見事なるもあれど、論旨繼續して佛道の意何所にあるを疑ひしむ、吉谷覺壽氏の佛教要旨の曾て令知會雜誌に登録したるを輯めて一冊と爲したるものにて、文辭簡明佛理の大體を知るに便利なりといへとも、議論序次無く、其の説明の毫も自然の關係に従はざるを以て、隔靴の嘆無き能はず、井上氏の佛教活論序論の氏か自から稱ふる一大論の緒言にして、真理の性質及佛道の組織を略論したるものなり、其の佛教を説明する部分は吉谷氏の著書に劣ること數等、敢て活論とも見えす、佛教活論の序論を一讀するものは必らず井上氏の人物を知らん、井上氏曰く余の舊里に在るや、同郷の兒童どもに遊ひす、凡そ兒童の樂みは飲食遊戲の外に出てすと雖、余の樂の獨り然らず、出て、江山の間に入れば草木の森々として自ら鬱茂し、流水の悠々として去て歸らざるを見、心竊かに怪む所あり、家に歸りて其理を思ふ、之を思ふに達すること能はざれば獨り茫然として自失し、幸ふ其理に

達すれの微笑して自得の狀を呈す、是れ余か兒どもに群せざる所なり云々、嗚呼井上圓了なる人の生れて未だ曾て兒童たりしこと無き豪傑の士なり、其老聃の如く白髮にして生れざるこそ遺憾なれ、井上氏曰く、愛理護國の情結んで余か一片の丹心となる、余能く此の心を養ひ、此の心能く余を護す、家貧にして敝衣凍寒を防ぐに足らずと雖、幸ひに此の心の存するありて、滿身爲めに煖を加へ、非食飢渴を支ふるに足らずと雖、幸に此心の盈るありて全身爲に肥ゆるを覺ふ云々、又云く我か生存する所の世界も我か身体も真理なり、余の真理を呼吸して生活するものなり、嗚呼余の真理を消化して生長するものなり云々、之に類する文字枚擧に遑あらず、或は然らん、然れども斯の如き誇張の言を爲し、妄りに想像を放ちて架空の説を稱へ、拍手喝采を專要とする演説家の所爲に眞似ふもの、ともに真理を談するに足らざるなり、井上氏か眞面目の文章、澹泊なる語氣の愈れるを取らず、反りて其反對に出てたるかために、己れの威光を減し、説く所をして明を欠かめたるの、其の著書の大瑕瑾なりとす、著者の近時世論の傾向する所基督教に在るを見、また士人多くの基督教を賛成する者なりと聞て、轉た慷慨の情に

堪へず、怒氣紙面に溢る、敵愾筆端より滴らんとす、海潮支ふ可きに非ず、噫亦時運の然らむる所、道理の存する所、勢力極めて旺盛なるべき、優勝劣敗の法則なるを如何せん、著書の議論に曰く、佛教の日本の特産なり、故に之を保護し外國に流布せざる可からず云々、特産果して保護す可き乎、然らば妾妻を置くの風習をも保存せざるへらす凡そ宗教の國産と外國産とを論すべきものに非らず、其の眞偽如何を顧みるに在るのみ、又曰く佛教を我國に再興せざるを得ざる所以、其の東洋文明の基本たる在り、東洋の文明を廢し日本の獨立を失ふを以て我人の國家に對する義務となさば則ち己まん、苟くも其の文明を維持し、其獨立を振起せんと欲せば主として佛教の再興を謀らざる可からずと、井上氏の所謂佛教を基本として起れる東洋の文明とい何ぞ、曰く寡人政府、曰く進歩の滯滞、曰く男尊女卑等の如きは是れなり、日本をして東洋流の文明を脱して泰西の文明に倣はむへとい名士達人の輿論に非らずや、今日に於て愛國の義務最も重きもの、此の停滯不進の開化、男尊女卑の開化、及君主專制平民を無みする開化即ち首として儒佛二道に養はれたる東洋流の文明を一洗するに如くいな、若し東洋

の文明を維持せんと欲せば佛教の再興を謀らざる可らずとするとさ、此の文明を洗濯せんか爲めに佛教を一掃すること必要なる筈なり、誰か此説を宣傳するものぞ、佛教活論の著者の即ち其人なり

井上氏又曰く西洋の文明の耶穌教の結果に非らずと、泰西の文明よして耶穌教の結果なるものあり、また他の原因より起れるもあるへし、耶穌教の西洋文明の專賣特許を求むるものにあらざれば、敢て此點を喋々するに及ばざるなり、然れども耶穌教が泰西諸國に於て政治風俗學術等の上より大なる影響を與へて美しき結果多かりし世自から定論の存するあり、故らば著者の議論を反駁するまでも無るべきか、著者又佛教を以て智情感具足の宗教なりと褒め、耶穌教の單に感情の宗教のみとて之を貶せられたり、何故に耶穌教の感情のみの宗教なりとするか、論者未だ其證據を挙げざるが故に、之より反駁を試みるに宛から空中を斫らんとするに異ならざるなり、而して彼が教ゆる所の小乗の智を満足せしむるものに非ず、此れ著者等の自から明言する所なり、其深甚至極と稱する大乘の空教及び不空教の、果して道理に適ひて能く吾人の智性を満足す可きも

のなるか、空教の淺薄なる偏眞の見解なりとの佛徒の自白する所なれ、今此に論するに及らざるへ、然らば其中道觀と稱する眞如實相一理体の説の如何にと考るに、此説の正理に適はざる所一にして足らず、未だ正理に適ふ事なり、焉んそ人の智性を満足することを得へけんや、彼等の議論を平易に述るとき、天地山川及び我も人も互に客觀主觀自他彼是の差別のあれど、元來たる實體のあるものに非ず、譬へは波の如きものなり、風吹きて水の面荒るゝとき、暫らく其の相を現せども、風静まれば其形を見ざるなり、一切萬物の斯の波の如し、其本を探くれれば眞如の一理のみ、存在して、我も人も凡そ一切萬物の眞實に存在するものにあらず、假りに其形を現はせるに過ぎざるなり、斯の如く一切萬物の空なるを觀し、又其の体の純一絶對なる眞如の一理あるを悟るとき、即ち眞正の佛となりたるなり、彼の涅槃など稱するものも到底此の眞如の一理体以外ならず、斯く見來れば所謂大乘の終教なる中道觀の、古より西洋の哲學者の間に往々唱ふるものなる凡神説ファンセイゴトの類なり、左らば今日まで凡神説に對して練磨し來りたる論駁の武器の悉く之を利用して佛者を惱ますに足るへ、泰西哲學の歴史の佛道を裁判するの法廷なりと謂はざるを得ず、

余の此篇に於て詳細に佛教を批評すること能はず、殊に佛教活論の本論も近く出版になるへとの事なれば、委曲の其の時譲りて此に佛教を非とする理由數ヶ條を簡單に述べ置かんと欲するなり、

第一 基督教徒及其他の有神論者の天地の經營人類の心性より論究して、萬物を作り之を主宰する無限の有ヘンレン心者の存在するを確信す、其の證左歴々として徴す可きなり、古來歐洲の理學哲學と與に進歩し人心を支配するに於て非常に勢力ある有神論の、無神主義なる佛道の敵なり、其の證左の悉く佛教を駁するの證左なり、有神論の堅固なる佛敎の不牢なる所なり、釋氏經典數千卷に及ぶも一有神論を確定するときは悉く土崩瓦解せざるを得ず、

第二 我の存在堅固ならざるとき、其の觀念思想する所の萬物悉く堅固ならざるなり、我にして空無ならば、萬物悉く空無なり、昔デカルトが我れ思想す故に我れ存在すといへるを以て其の哲學の基本と爲せるも亦宜なりといふへ、佛者云く我は假相

なり真相に非らず、我の体なり真正の有にあらざると、是れ萬物を空無に歸するの説なりたゞに然かのみならず我の實有を非とするとさし其尊ぶ所の眞如の實有をも信ずること能はざるべし、假相空無にして忘念あるか爲め暫らく我執に縛らる、此心を以て如何を眞正の實有を知らん、其思想に浮み出づるもの如何で其の虛妄ならざるを保す可けんや、已に我なりと執するも迷ひならん、如何て眞如の理体なりとするの迷ひならざるを證せんや、佛者云く一切諸法の空にして空にあらざり、有よりて無、無にして無にあらざり、所謂中道觀は主觀客觀を兼ね物心を兼ねるものなり、何ぞ必らずしも我無しといふんと、此く論ずるを聞けり聊か道理ありけに見ゆれども、此れ全く言を弄し語を巧みにするものなり、佛者世を瞞着するの術多くの此の種類の詭辨あり、察せざる可からず空にして空ならずといひ、山川も我人も共に假相にして空なれど一理体の空ならざるものありと云ふことなり、空の字を適用する所前後同一からず、故に空にして空にあらざると主張するも我の實に空なり、我已に空ならん眞如實相亦空なり、之を實有と認むるの妄念なり、無明なり、何ぞ一切皆空と論せざるや、若し眞如の存在を確定せんと欲せ

は我か實有を認めざる可からず、我を實有と認むるとさし唯一理体なるもの存在すること能はざるへし、海山の沈黙して佛の眞如説を非難せともあれ、此の單獨なる我なるもの能く此の異端を排斥するに足らん、

第三 佛道の本意の無常を觀し、有爲轉變の世の中に、常住なるもの不變なるもの何所にありやと尋ねるに在り、而して佛者の所説に由れり此の常住不變なるもの萬物を總括し、内外物心を兼ね、主觀客觀を具有せる眞如の一理体なり、其の謂ふ所の涅槃亦此に在り、我人之を明らかに悟るとさし即ち成佛の果を結び常住不變の樂地に遊ぶことを得へしと、然れども細かに之を考ふれば、此の眞如の理体亦常住不變に非るなり、何となれの萬事流轉し生滅無常實に東逝の長波西乘の殘照石を撃つ星花風前の微燈草頭の懸露目に灼くの電光に異ならずといへども此の流轉變遷するもの何ぞや變遷が變遷するか流轉が流轉するか、此の若きの理の萬々ある可きにあらざり、然らば實物ありて其ものが流轉するか、然り流轉變化といふ物ありて流轉變化する事なり、生滅といふ体ありて生滅することを謂ふなり、未だ用ありて其体なきものあるを聞かず、此理明々と

して睹易し、佛者曰く一理体の外に物無し、純一理性の外に實體なりと、然らば世上の有爲轉變の此の眞如の轉變なりと謂はざる可からず、噫流轉の世を嫌ひて常住不變の眞如を求むれば、眞如亦遷流して止まず、否眞如の遷流の源泉なり、流轉すら尙ほ厭ふべし況んや其の源泉をや、前面は火あり之を解説せんか爲めに後面に至れば更に甚き猛火あり、進退是窮れり、佛者何を爲さんとするか、以上の如く説き來れば眞如の純一に非らず亦常住不變に非らず、佛徒の眞如此に至りて泡沫夢幻となりて滅し畢りぬ、第四 假りに佛者の唱ふる如き眞如の實體ありとせんか、如何にして此萬象を生じ、如何にして人物の此の宇宙間に現れたりや、盡し純一如何にして復雜を生じたりやとのホモジエナイア ヘテロジエナイア スペンセル氏の哲學に於て大問題として論ずる所なり、佛者の如何なる方法を以て其の眞如の理体より諸の差別一切萬物を開發するやと問ふに、曰く夫れ眞如の自性清淨平等にして差別なく不生不滅なり、然るに以不達一法界忽然念起名爲無明、此の無明によりて萬象の生出したるなりと、思ふに無明との癡惑の義なり、癡惑如何にして此の美妙なる天地人物を生じたるや、是れ最も解し難き説なり、我人の起る素と無明を縁とす

ると考ふるべきは、此心即ち無明の結果なり、悟らんと欲するも益なく、佛果を得んと欲するも癡惑の致す所ならずや、佛徒又曰く無明の無始なりと果して然らば無明の盡未來際滅す可きものにあらず、衆生の全く濟度せらるゝこと得て望むべきに非らず、何となれば凡そ物無始なれば必有なり、必有なれば滅す可からざるなり、故に無始の無明永く斷絶するの時期ある可からず、無明にして斷絶せざる時の一旦中道の妙理に達して涅槃に入りたるものも再び迷ひ出ること無も保証す可からず、佛徒此の難題を解説し去らんと欲して種々比喩を附會したれども、其目的を達すること能はざりき、彼の徒又曰く無明忽然として起ると、忽然の字如何にも其説に窮したるを見るなり、蓋し無明の寓る可き体無かる可からず、博學とい博く學ひたる人に属するものなり、無明とい必らず無明を起せるもの若くは無始より無明なるもの、性質なり、誰か此の無明を起せるものぞ、此の無明の誰の有する所なるや、眞如理体の外に獨立して存在するものなるや、曰く然なりとい佛者の答へ得ざる所ならん、然らば無明の眞如の体に属するものか眞如の無始より無明なりか、果して然らば眞如の無始より妄見を懷き、彼我の差別を



立てたるものなり、此に至りて佛者の崇敬する所の眞如何にありや、起信論に無明之相不離覺性非可懷非不懷など謂ふ曖昧の議論の取るに足らざるなり、

第五 差別を立て平等を破るの萬物進化の徵候なり、人性の開達の分別を極め復雜に入るに在りとの今の學者が常々主張する所に非ずや、然るに佛者曰く差別の害惡なり、分立の禍惡なり、此の若き皆無明より生すと、何ぞ其の誤謬の甚きや、山あり我之を愛すへー天あり我之を仰くへー父母あり我之に孝を盡すへー、上帝あり我之を敬愛すへきなり、彼我の別必らずも害惡に非らず、彼我無きとき我寂寥として樂まず、孤獨の世界の害惡の世界なり、況んや彼我共之れ無きの世界をや、彼其何たるをも知らざるなり、差別を立て害惡と誤認するの佛氏迷惑の初門なり、若此の無明を除かされの佛氏明覺の境に至ること能はざるなり、

第六 古より洋の東西を論せし、凡そ凡神説を唱へ、若くは無神主義を懷きたる學者の大抵意志の自由を信せず、吾人の舉動云爲は悉く因縁の然らむる所、必須にして起るものなりと説きたり、是れ自から其主義とする所より出る議論の結果なれば深く怪し

むに足らず、左れの佛教活論の著者が萬物悉く必然の道理に歸せざるを得ずと論究したるも亦宜ならずや、吾人の道德にもあれ學問にもあれ、總へて今日の有様に達したるの皆因縁の結果必然の教なり、是れ哲學に所謂「エータリズム」(宿命論)に非ずや、宿命論の人事に於て頗る有害なる主義なり、中に就て宿命説と道德との兩立すべきものにあらざるなり我實に体あるに非らず、眞如獨り体なり、我徳を爲すも我の爲せるに非らず、萬物の眞如を体とす、我不正を行ふも因縁の然らむる所、前世の宿業に因れること故、善も無く惡も無く、隨て眞實の賞罰立つこと能はざるなり、凡神説に於ても佛教に於ても、其因縁必然の理を推究するとき在るもの起るもの皆正と謂はざるを得ず、然るに佛者の斯の如き主義を教ゆるにも拘からず、惡を行ひて之を慚愧後悔して天公の責罰を恐れ、自から自由の力を以て因縁を支配し修行して佛道を成就せんと試みるか如きの、己れの道に違反せるものと斷定するも何の不可か是あらん、罪惡の必然なるものにあらず、善惡の互に方便となるものにあらず、然るに佛道の眞意を叩けり罪惡を必然とし、善惡を互に離る可からざる關係あるものとす、是れ良心を無みするの

教なり、余ハ釋氏の金口を以て之を説き示さるも斷乎として抗拒せざるを得ず、

第七 信仰と愛と望の宗教の三綱なり、此三つのものを欠くときは、宗教の名あるも實は宗教と謂ふに足らず、佛教ハ吾人をして何を信仰せしむるか、曰く有ることなり、佛教ハ吾人をして何を愛せしむるか、曰く信と謂ひ愛と謂ふ是れ皆差別の相なり、不生不滅の眞如實相を悟るときハ何の愛す可きものは是れあらん、其の宗教たる所何所にあるや、佛教の徒何を望むか、寂滅爲樂と唱ふれども、我も彼もなら眞如の理体に望む可き所なり、斯の如く釋氏の遺教ハ極めて冷淡なるものなり、若し佛教の尊敬する大乘の教を信するときハ、信望愛共に其目的の達すること能はざるへし、然るに其教法にて能く東洋の人民を化導し廣く天下に行はれたるものハ何ぞや、是ハ佛徒ハ其の主義を味まり、佛陀を拜すると上帝に事ふるか如くし、千萬無数の偶像を作りて之に禮し、快樂極まり無き天堂を説き、苦惱喩ふるに物無き地獄を示して、且つかに信望愛を繋ぎ留めたるなり、無神主義の佛法ハ有神の狀を裝ひたるハ、蓋し佛道の宗教とするに足らず、有神論の欠く可からざる所以を証するに足れり、

基督教ハ佛教の説く所に反して、萬物の全能の有心者たる神の造成したるもの、其性徳無限なり、設如天變り地壞るゝも上帝の体性の常住不變よりて能く我を愛す、我亦上帝を敬愛することを得るなり、宇宙萬物の忘念によりて現れしよあらず、上帝至愛の徳に由りて成りしものなり、善も美も道も兩間に充盈せり、吾人は之を見て觀喜し、之を思ふて上帝の聖徳を稱讚し、且つ信し且つ愛し且つ望み、着々聖域に進入せんと欲す、豈純全の宗教にあらずや、世界にハ患難罪惡なきにあらず、神子基督の中保によりて此罪惡を免れ災害を脱し、吾ハ天性を全するの境に至らんとす、愛するものよ我儕今神の子たり後如何未だ露れず其の現れんとしよあらざる神に肖んことを知るなり其の我等其の眞狀を見る可けれなり(約一三)の二(約一三)凡神説無神論ハ泰西各國に左まで勢力の盛んなるものに非ず、其の力得て基督教の衝に當ること能はず、議論に於ても實際に於ても甚だ微々たるものなり、東洋の凡神説無神論なる佛教を以て基督教に抗し、今後日本國の社會に於て鹿を逐はんとするも、到底永く己れを維持すること甚だ困難ならん、其故ハ凡神説も無神論も、余り無味にして信望愛の心を動かすこと能はず、且つ其理論も決

して堅牢なるものよめられぬなり、設如佛者其方便を逞ふして、泰西の學理も佛説を附會し、或ひは念佛三昧の如き俗間今日の佛教を擴張して、大乘教の欠典を補はんと思ふも、世進み時移りて第十九世紀となりては、逆も其志を果すことある可からず、況んや耶蘇教の駸々乎として日本國の中央にまで進み入り、頻りに其弱點を衝くに於ておや

以上論述する所餘蘊なきも非らず、實體本質の理に關する佛説の其迷の根本なり、其他佛教原因論の誤謬、靈魂説の非理、佛教と社會の關係等の如き、論難攻撃す可きもの多しといへども、其の他日佛教活論後篇の出来るを俟ちて詳かに之を辨す可きなり

#### 第十四 耶佛優劣私考 (六合雜誌第八十四號)

高橋 五郎

諸君、今余の諸君と人間の最大奇觀を講究せんとなす、人類か萬物の中に在て占る所の

地位に關しての古來諸説紛々たりと雖も今其顯のす所の現象を仔細に觀察すれば下等動物と人類とを區別するの一大奇觀人間に存すと謂はざる能はず、其一大奇觀とい何ぞや、他なり、諸君を此に集めたる宗教心即ち是なり、實に佛國有名の人類學者カトル・ファシの此宗教心を基礎として人類界を建設せり、其言に曰く「(第一)人類の身體の苦樂を離れて別に道德上の善惡を識る、(第二)人類の己れの上に位する所の神物ありて能く我運命を左右すと信す、(第三)人類の其靈魂の不滅にして死後も尙生命ある事を信す、此第一の即ち道德に本つき、第二第三の宗教心は歸す、是實に下等動物界と人類界との由て別る、所にして彼の大リンニウス(Linnæus)の如きも形體上につきては之を上等猿猴類の中に伍せしめられたれども其記述する所と之か緒論とを以て暗に之を別世界と置きたり、」と、佛國の世に不信心を以て目せらるゝ國おれども尙其一等の學者の中に是の如き説あるを見る、唯彼のまならず、高名なる佛蘭西大學の教授フランク氏か文部省の意に循て著述して諸學校に用ひしむる道德學(修身倫理の學)の書の如きも斷然説を爲して曰く「道德と稱ふる思想の神明の公義と宗教の認定とを含む者なり」と

又曰く「道德の思想を以て唯に天地の一理と爲し、之を以て神明を離れて獨立せしむる者の未だ功德と應報の理、福善禍惡の由を解説する能はず」と、終に明言して曰く、「公明の道理及び人類一般の情理と信心との共々等しく彼の近來稱道せらるる所の獨立道德(即ち神明を以て本源と爲さる所の道德)を排斥して取らず」(La saine raison, aussi bien que le sentiment et la foi universelle du genre humain, répudie ce qu'on a appelé récemment la morale indépendante, c'est-à-dire une morale absolument étrangère à la croyance en Dieu.) と、是等の諸説の皆宗教心の人類一般に具足するを証明する者を見做す可し。

借世上の學者の論する所の大抵是の如し、而して之を實地に驗するに天下諸國文明野蠻を論せず、一として多少此宗教思想を顯し、するの無し、是實に人生の奇觀と謂ふ可し、此思想其始如何にして起り、や、此事にも亦説ありと雖も是全く別問題なれば姑く措いて論究せざる可し、或人の宗教を以て他の罪惡と同く無知より起り來れる者と爲せり (Die Religion ist nicht minder, wie Verbrechen und Sünde, ein Erzeugniss der

Unwissenheit.)、假令其事幾分か實を得たるにもせよ、此宗教心の虛妄なる者に非ず、其本つく所の天地の大原因にありて其關係する所の此絶妙なる靈心に在り、スペンセルの如き不可思議論者も此真理の掩ふ可らざるを見て宗教と學理の終に同一本源と歸り去る所以を詳論せり、具其原理篇 (First Principles)に見ゆるか如し、

已に是の如くなれば余の今宗教心を以て人類特有の賜物と爲して之に對する諸宗教の善惡當否を辨せんとする也、然れども世上の宗教を悉く論究するの容易の事に非れり、今の只其最も大にして最も近く我等に關係する所の者を擧ぐ可し、是即ち諸君か知らるる所の佛教と耶蘇教なりとす、但し余今之を辨論すると雖も決して諸君よりも明かに之を知ると言ふに非ず、諸君よりも一日の長する所ありと言ふに非ず、否否決して然らず、唯唯愚見を陳して諸君に質す者なり、願くは其亂雜支離なるを容れて聽き給はん事を、

抑耶佛の優劣たる一々之を細論すれり或は一月或は一年を要せん、故に余の直ちに其根本に就て一刀兩斷の法を施さんとす、夫耶蘇教と曰ひ、佛教と曰ひ、共に此人類の宗

教心を満足させるの法なり、若し此目的を達するに必要なる資格を備へざらんか、是れ名の宗教にして實の宗教に非ざるなり、何ぞ優者と名くるを得んや、思ふに此事を明にせんには先宗教の定解を得ざる可らず、宗教の定解を得んには人心の理を究めざる可らず、但し是等の事の古來之を研究せる者ありて我等今之に由て勞せずして益を受くるを得へし、故に今時刻を費やさざらん爲に先覺の定解を借て此に出さん、先覺の語に曰く

「宗教の人生の最良の指南者なり、歡樂の日に於ける最良の師友なり、憂患の時に於ける最良の慰藉者なり、宗教の基礎の神明の存在を認むる確乎不拔の信心なり、神明の攝理監督を信じ、道德の至貴至高なるを信じ、人類の靈魂の不滅を信じ、現世の所行に循て死後に賞罰を受くるを信する確乎不拔の信心なり、」

“Die Religion ist die beste Führerin durch das Leben, die beste Leiterin in frohen Tagen, die beste Trosterin im Unglück. Die Grund aller Religion ist feste, unerschütterliche Ueberzeugung von dem Dasein Gottes, von seiner Vorsehung, von

dem hohen, alles überwiegenden Werthe der Tugend, von der Unsterblichkeit unsers Wesens, und der Vergeltung nach dem Tode für unser Leben hier auf der Erde.”

是實に上に述たるカトルファシ等の考ふる所を十分に詳説したる者にして全く心理より引出し來れる者なる事は已に諸君の認めらるゝ所ならん、諸君各々冥想せられぬべからず是等の事か人類の思念と希望たることを了知せらるゝならんと思す、

故に今此定解を以て佛教と耶蘇教とを照さんとす、勿論之を爲すには双方ともに純粹なる者を撰まざる可らず、耶蘇教に於ける聖書を本とする新教を擧げ、佛教に於ける淨土日蓮の如き後世の宗派を取らずして直ちに最古の佛教を擧ぐ可し、

先此定解を以て耶蘇教を照すに其天啓たるに然らざるとに關りて凡て是等の欲望に應ずる原素を具ふ、即ち天父と尊信する造化主宰の活神あり、攝理監督の萬有に及ぶと説くあり、道德と神より出る者にて犯す可らずと教ふるあり、靈魂の不滅にして死後に至りて現世の應報を受くと爲すあり、加之救世主ありて神人の間を調和し罪人に恩典の望を懐かめ、苦難者を憐れみ、驕傲者を懲らし、人生の苦患を樂みの中に緩め、

正義公道を心の奥底にまで通達せしむ、是世界に尊信皈依せらるゝ所以なり

目を轉して又佛教の如何を見るに是と全く反對するの説を見る而已、即ち佛教の造化主宰の神明あるを認めず、亦其攝理あるを認めず、道德を道德自身の價值より由て貴重せず、靈魂の滅不滅に至りての業識感得（即ち因果）を以て之を説きて輪廻轉生環の端なきか如しと爲し、是を以て人類の感情を以て雪の如く寒からしめ人生の苦患を以て山嶽の壓するに等しからしむ其結果の即ち世を厭ひ身を惡む、己を見る事大蛇の懼る可きか如くにし、苦を増し難を累ね、山に猿猴と飢渴を争ふ、谷に木石と共に顛轉し、千辛萬艱の長路を経て鳥も通ぬ氷山の寂滅に歸せんとするに在り、彼の恩愛の己み難き父母妻子は只是此氷山の路に涌出る温泉の如し、之に觸れぬ即ち寂滅の氷を融かすの恐れあり、人情の慾火の紅焰天を焦すの大火事よりも厭ふ可し、是實に佛教の本體なり、此寂滅の旅路に益ある者の人を殺すと雖も尙可なり、此旅路に害ある者の親を助くると雖も不可なり、是佛教の道德なり

若此佛理を實行し來らぬ此世の一日も立つ可らず、是全く人類の性質地位に適合せざ

る者なれりなり

諸是の如くなれり佛教の世間に行ゆる可らざるの明かにして耶蘇教に劣る所も自ら知らる可し、他の世界の去來知らず逆も此世に佛教の行なゆる可くも非ず、宜なる哉今日佛教の識者に棄てらるゝ事

人或之問はん然らぬ支那蒙古日本等に現在佛教の存するの如何んと、我答へて曰く、是眞の佛教に非ず、是出世間の佛教に非ず、世間の佛教なり、佛教已に己か人性に反して到底行なゆる可らざるを見しかん先世人の宗教心を伺ひ探り竊に服裝を變じて其宗教心に投合し、彌陀觀音の類を設けて造化主宰の神又の救世主に代へ、未來の極樂往生と墮獄とを説きて死後の賞罰に代へ、是の如くにして又人倫の道を講し、徹頭徹尾世人の宗教心に倣ひて教体を組織せり、是今日まで佛教が世に行なはれたる理由なり、佛教すらも已に此宗教心に化せられたり、我の益上よ掲げたる宗教の定解の誤らざるを知り、又耶蘇教の善く此宗教心に適應するを見るなり、之に反して佛教の早かれ晚かれ其化の皮を全く脱して中原を去りて雪山に逃込まざるを得ざるを察知す、是真面目の佛教

の山間に非れハ繁昌せざるが故なり、今此論辨を一口に纏めんは人類の此宗教心全く  
虚妄ならハ率知らず、此宗教心にして眞實を得たる者ならんにハ佛教の到底耶蘇教の  
敵に非るなり

版權登錄

基督教文集 基督教と佛教終  
學第一集

明治二十二年三月二十日印刷  
同 二十二年四月一日出版

（價定金二十錢）

編輯者兼  
發行者

東京麴町區中六番町十番地  
池本吉治

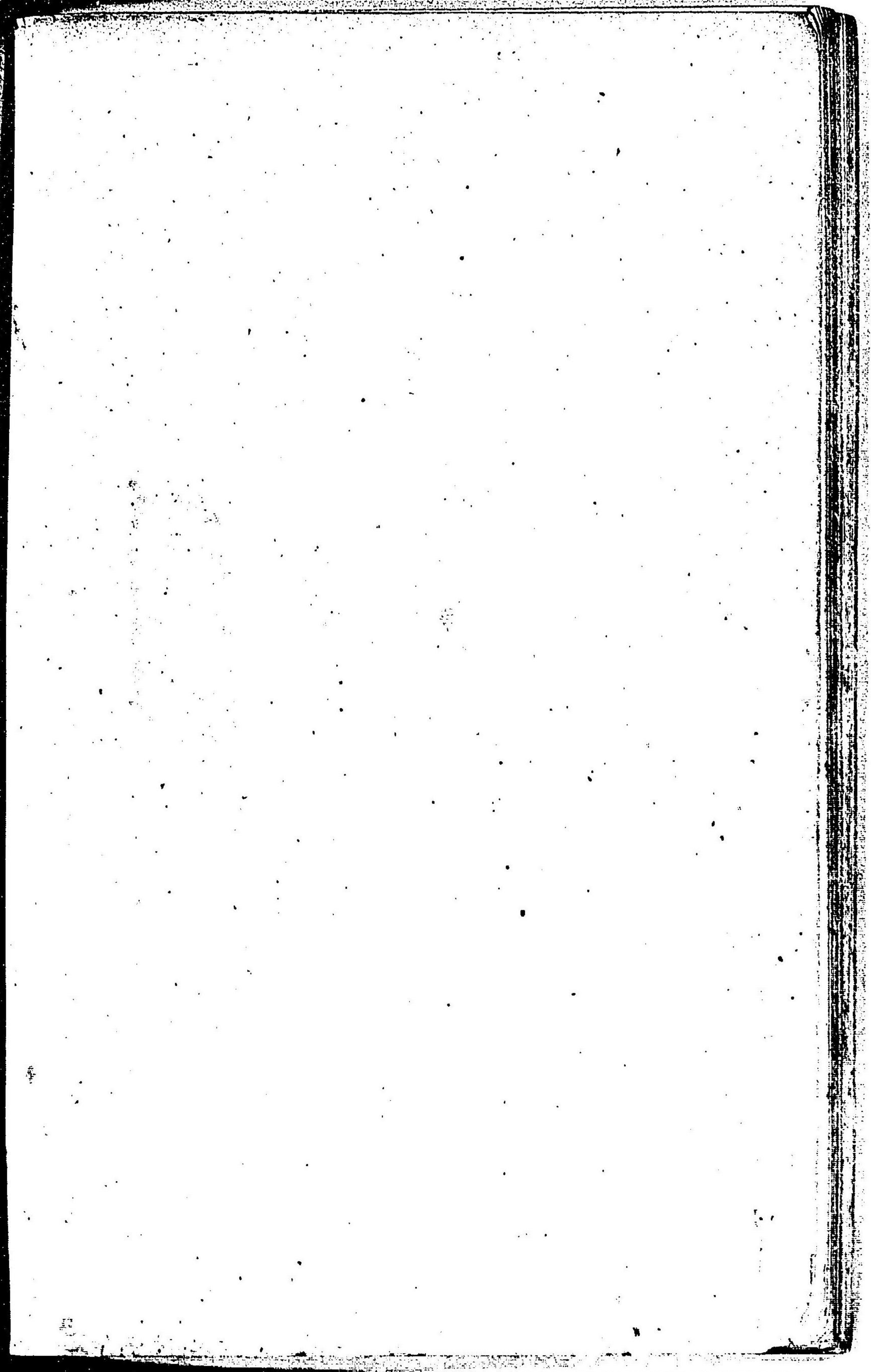
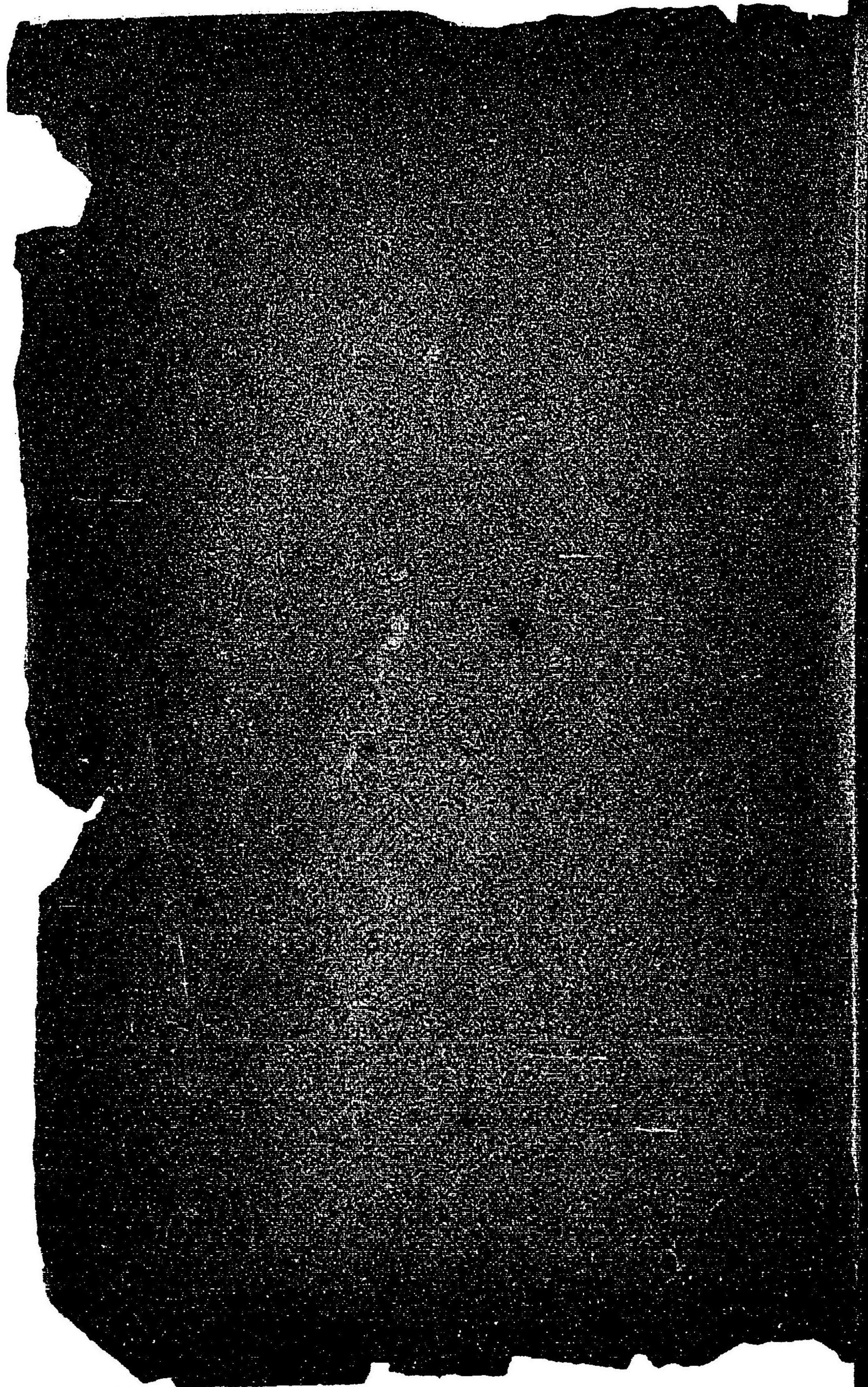
印刷者

東京々橋區加賀町十一番地  
福永文之助

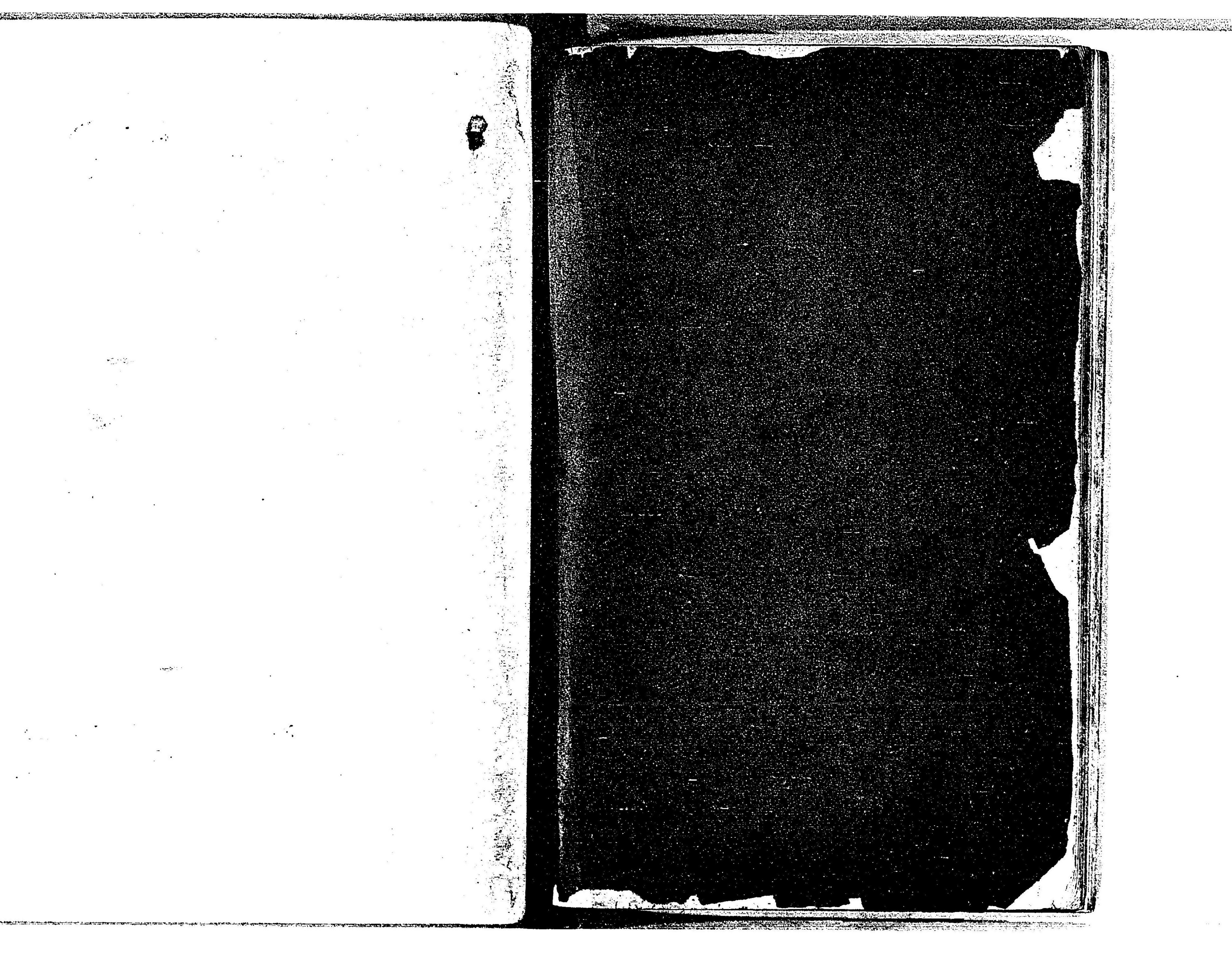
版權所有

東京々橋區加賀町十一番地

發行所 警醒社







020486-000-1

特18-491

基督教及仏教

池本 吉治 / 編

M22

ABI-0296

